

令和五年学力検査

全日制課程

第一時限問題 国語

検査時間 九時十分から九時五十五分まで

「解答始め」という指示があるまで、次の注意をよく読みなさい。

注 意

- (一) 解答用紙は、この問題用紙とは別になつています。
- (二) 「解答始め」という指示で、すぐこの表紙に受検番号を書きなさい。 続いて、解答用紙に氏名と受検番号を書き、受検番号についてはマーク欄も塗りつぶしなさい。
- (三) 問題は(1)ページから(9)ページまであります。(9)ページの次からは白紙になつています。受検番号を記入したあと、問題の各ページを確かめ、不備のある場合は手をあげて申し出なさい。
- (四) 答えは全て解答用紙のマーク欄を塗りつぶしなさい。
- (五) 印刷の文字が不鮮明なときは、手をあげて質問してもよろしい。
- (六) 「解答やめ」という指示で、解答することをやめ、解答用紙と問題用紙を別々にして机の上に置きなさい。

受検番号
第
番

五 話

五 話

一 次の文章を読んで、あとの一から五までの問い合わせに答えなさい。

① 人はなぜ掃除をするのだろうか。生きて活動するということは、環境に負荷をかけることだと、人はたぶん本能的に自覚している。だとしたら、負荷を生まないよう、自分たちが生きるために恵まれたこの自然を汚さないように活動すればよさそうなのだが、人の想像力あるいは知力は、負荷をかけ続けた果ての地球を想像したり、数世代先の子孫の安寧に配慮したりすることには至らなかつた。今日、僕らは眼前に現れた危機、「A」浜に打ち寄せ海洋に堆積する大量のプラスチックゴミ、気候変動によるゲリラ豪雨や巨大台風、極点の氷や氷河の解氷による潮位の変化など、近づきつつある危機の予兆をまのあたりにして、地球という資源の限界に気づき、「持続可能性」などという殺伐とした言葉を口にするようになった。文明は急ブレーキを踏み、大慌てでハンドルを切ろうとしている。確かに必要な反省であり対処であるから、これに異を唱えるつもりはない。しかし、いきなり「地球」という大テーマを口にする前に、人が本来持つてははずの自然や環境への感受性^{はんじやうせい}を反芻^{はんがう}してはどうだろうか。

② さしあたつては「掃除」である。人は掃除をする生き物だ。掃除は誰に教わることなく、あらゆる文化・文明においてそれぞれの方法で行われてきた。ある仕事で、世界中の掃除の情景を映像として集めたことがある。オペラハウスの客席の掃除、バイオリン奏者の楽器清掃、教会の窓拭き、公園の落ち葉除去、モスク周辺の街路掃き、イランの絨毯掃

除、万里の長城の掃き掃除、奈良の東大寺で毎年行われる大仏のお身拭い……。集めた映像を数秒ずつ数珠つなぎに編集して眺めると、不思議と胸が熱くなる。人類は掃除をする生き物なのであるが、なぜ人は掃除をするのか。ここに何か未来へのヒントがあるようと思えてならない。

③ 少し観察してみると、掃除とは、人為と自然のバランスを整える営みであることがわかる。未墾の大地を、自分たちに都合よく整え、都市や環境を構築する動物は人間だけだ。だから自然に対しても人がなした環境を「人工」という。人工は心地がいいはずだが、プラスチックやコンクリートのように自然を侵食する素材が蔓延^{まんえん}してくると、人は自然を恋しがるようになる。「人工」は巨大なゴミなのではないかと気づき始めるのである。一方、自然はといえば、放つておくとほこりや落ち葉が降り積もり、草木は奔放に生い茂る。自然は人を保護するためにあるわけではない。放つておくと荒ぶる姿となつて、人の営みを蹂躪^{じゅうりん}する。人が住まなくなつた民家の床や畳の隙間からは、またたく間に草が芽を出し、生い茂り、数年のうちに草木に飲み込まれてしまう。緑を大切に、などという言葉ももはや出ないほど、緑は猛威をふるうのだ。だから人間は、自然をほどほどに受け入れつつ、適度に排除しながら暮らしてきた。おそらくはこれが掃除であり、そのバランスこそ掃除の本質であろう。

④ こんな風に掃除のことを考えているうちに、「庭」に思いが至つた。庭、特に日本の庭は、「掃除」すなわち自然と人為の止揚、つまりその拮抗^{きつこう}とバランスを表現し続けているものではないかと思つたのである。掃除はもちろん日本だけのものではないが、お茶を飲んだり、花を立てたりという行為を茶の湯だの生け花だのに仕立てるのが得意な日本人である。住居まわりの環境を整える「掃除」という営みを「庭」という技

芸に仕上げたのかもしない。落ち葉は掃きすぎず、草木も刈りすぎず

程よく茂るに任せる。まるで、打ち寄せる波が砂浜をあらう渚のよう

に、人為と自然がせめぎ合う「ほどほどの心地よさ」を探し当てるこ

と、それが庭の本質である。庭は美的な作為であり創作物と思われて

いるかもしれないが、自然に対するあらゆる人為は、いわば「じでかし」に過

ぎない。しかし、そのしてかされた庭に愛着を覚え、これを慈しむ人々

が現れて、程よく落ち葉を掃き、苔を整え、樹々の枝葉を剪定し、守り

続けた結果として「庭」は完成していくのだ。当然、長い時間が必要だ

が、歳月のみが庭を作るわけではない。やはり「人為と自然の波打ち

際」が管理され続けることが必須である。

〔5〕 大上段に振りかぶつて「地球温暖化対策」とか「持続可能な社会」を

考えるのも重要なことだと思うが、歴史の中、文化の中に蓄積され、す

でに人に内在しているはずの知恵や感受性に気づいてみることも同じく

らい重要なのではないか。海外の旅を終えて日本の国際空港に降り立つ

ときに、いつも感じることは、とてもよく掃除されていることである。

空港の建築は、どこも質素で味気ないが、掃除は行き届いている。床に

シミひとつないというような清新しさではなく、仮にシミができるても、

丹念に回復を試みた痕跡を感じる。そういう配慮が隅々に行き届いてい

る空気感がある。おそらく、日本のラグジュアリーの要点には掃除があ

る。ただ単に、磨きあげるのではなく、自然や草木といったものに心を

添わせつつ、生きている者としての張りを感じていること。石や木、しつくいや畳といった素材に気持ちを通わせつつ、その自然な様相を味わ

い楽しむ感覚が掃除であり、そういう営みの中に日本のラグジュアリー

は宿るのかもしない。
(原研哉『低空飛行——この国のかたちへ』による)

(注) ① 〔5〕は段落符号である。

○ 安寧=穏やかで平和であること。

○ 殺伐=すさんでいるさま。

○ 反芻=ここでは、一つのことを繰り返し思い、考えること。

○ モスク=イスラム教の礼拝堂。

○ 数珠つなぎ=多くのものをひとつなぎにすること。

○ 蔓延=広がること。

○ 踵躅=踏みにじること。

○ 止揚=対立する二つのものを高い段階で統一すること。

○ 拙抗=ほぼ同じ力で互いに張り合うこと。

○ 剪定=枝の一部を切り取って整えること。

○ ラグジュアリー=ここでは、空間から感じられる心地よさのこと。

○ しつくい=日本建築の壁や天井などに使用される塗料の一つ。

(一) 「A」にあてはまることばとして最も適当なものを、次のアから

- Eまでの中から選びなさい。
- ア しかし イ それとも ウ つまり エ なぜなら
- (二) ① 人が本来持っているはずの自然や環境への感受性 とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからEまでの中から選びなさい。
- ア 自然や環境が絶えず変化していくという事実に気づく力
イ 人の活動が自然や環境に負荷をかけていることを感じ取る力
ウ 自然や環境が変化していく姿を数世代先まで予測する力

(三) 次の文章は、ある生徒が第三段落と第四段落の内容をまとめたものである。この文章に対する評価として適当でないものを、あとのアからオまでの中から一つ選びなさい。

人間は、自然をほどほどに受け入れつつ、適度に排除しながら暮らしており、そのバランスを整える営みが掃除である。また、日本の庭は、人為と自然がせめぎ合う「ほどほどの心地よさ」を探し当てるなどを本質としている。だから、日本の庭は、人為と自然のバランスを整える掃除という営みを、技芸に仕上げたものであると言つてよい。

- ア 本文にある具体例や比喩を省略して端的に記している。
イ 掃除の本質を述べた部分を本文から適切に抜き出している。
ウ 接続語を使用することで論理の構造を明確にしている。
エ 掃除と日本の庭に共通している点を的確に述べている。
オ 日本の庭が技芸に仕上げられた理由を簡潔にまとめている。
- (四) 次のアからエまでのうちから、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選びなさい。
- ア 環境に現れた危機の予兆に接した私たちは、地球という資源の限界に気づき、持続可能な社会について考えるようになった。
イ 掃除という営みと切り離せない日本の庭は、日本的な他者への思いやりを表現しており、海外でも高く評価されている。
ウ 環境問題を解決するためには、文化や文明の力を最大限に引き出し、人為と自然のバランスを回復させる必要がある。
- エ 日本の空港で居心地の良さを感じるのは、床が隅々まで磨きあげられ、シミひとつない新しさが保たれているからである。

(五) あとのアからオまでは、本文と次の参考文を踏まえて筆者の考えをまとめたものである。その内容が本文と参考文に書かれた筆者の考えに近いものを一つ選びなさい。

(参考文)

四万十川は、高知県西部を流れる清流である。もちろん川もきれいだが、そこにある人々の暮らしと一体になった風景に、しみじみと考えさせられるものがある。特に注目したいのは「沈下橋」と呼ばれる橋である。

日本は台風の国であるが、高知はその玄関口のような場所で、自然の猛威から逃れるすべはなく、それを受け止めるべく暮らしの環境を整えてきた。四万十川は増水すると激しい渦流に変貌するのであるが、興味深いことに沈下橋は増水するとあっさり水面下に沈んでしまう。橋には水流の抵抗となる欄干がなく、橋の断面は飛行機の翼のような形をしているので、水に潜ってしまうことによって破壊から逃れる、という構造になっている。

この沈下橋が、上流から下流まで、つまり短い橋からとても長い橋まで六十あまりある。その土地の人たちの暮らしの必要から必然的に生まれてきた橋であるからいわば環境デザインである。最近は、しつかりとした橋脚を持ち、ずっと高いところに架橋され、増水にもびくともしない「抜水橋」がいくつかできましたが、残念ながら便利さと引き換えに、四万十川と沈下橋がおりなす風景を壊しているというほかはない。確かに、増水のたびに水に沈んで通れなくなる橋は不便かもしれないが、自然の脅威を肌で感じつつも、川と近い距離で水に親しみつつ生きる暮らしに、四万十

川流域の人々が心地よさや誇りを持っているのだとしたら、この景観を守つていくことの方が豊かと言えるだろう。

(原研哉『低空飛行——この国のかたちへ』による)

(注) ○ 檻干||人が落ちないよう橋の両縁に設けられた柵状のもの。手すり。

ア 本文も参考文も、自然の猛威から人々の生活をいかにして守るか

ということが共通のテーマになっている。

イ 本文も参考文も、人工的なものはできるだけ排除して自然を後世に残そうという考えが柱になつていて。

ウ 「庭」も「沈下橋」も、自然のもつ荒々しさを受け入れて環境を整えながら生きる暮らしが象徴している。

エ 「沈下橋」は「庭」とは異なり、自然の猛威から逃れようとすることのむなしさが表現されている。

オ 「庭」と同様に「沈下橋」は、自然との共生を図りつつ「デザイン性を高めること」を意図して作られている。

二 次の一(一)から三)までの問い合わせに答えなさい。

(一) 次の文中の傍線部①、②に用いる漢字として正しいものを、それぞれあとのアからエまでの中から一つ選びなさい。

ヒ | ヨク な大地が広がる。

① ア 肥 イ 被 ウ 非 エ 比
② ア 浴 イ 翼 ウ 翌 エ 沢

(二) 次の文中の傍線部と同じ意味で用いられている漢字として正しいものを、あとのアからエまでの中から一つ選びなさい。

厳かな雰囲気の中で卒業式が行われた。

ア 厳選 イ 厳肅 ウ 厳禁 エ 厳守

(三) 次の文中の「A」にあてはまる最も適当なことばを、あとのアからエまでの中から選びなさい。

科学技術は「A」の発展を続いている。

ア 東奔西走 イ 不易流行 ウ 一触即発 エ 日進月歩

三 次の文章を読んで、あの(一)から(六)までの問い合わせに答えなさい。

[本文にいたるまでのあらすじ]

気象学者である藤巻先生の研究室に所属している大学三年生の「僕」は、先生の息子で中学三年生の和也の家庭教師をしている。一九七五年の夏のある日、「僕」は藤巻先生の奥さん（スミ）の招きにより、藤巻家で一緒に食事をすることになった。

[本文]

〔1〕 「ねえ、お父さんたちは天気の研究をしてるんでしょ」 和也が箸を置き、父親と僕を見比べた。「被害が出ないように防げないわけ?」「それは難しい」 藤巻先生は即座に答えた。「気象は人間の力ではコントロールできない。雨や風を弱めることはできないし、雷も竜巻も止められない」「じゃあ、なんのために研究してるの?」 和也が「A」眉根を寄せた。「知りたいからだよ。気象のしくみを」「知つても、どうにもできないのに?」「どうにもできなくても、知りたい」（中略）「やっぱり、おれにはよくわかんないや」「わからないことだらけだよ、この世界は」先生がひとりごとのように言った。「だからこそ、おもしろい」

〔2〕 一時はどうなることかとはらはらしたけれど、それ以降は和也が父親につつかることもなく、食事は和やかに進んだ。うなぎをたいらげた後、デザートにはすいかが出た。話していたのは主に、奥さんと和也だった。僕の学生生活についていくつか質問を受け、和也が幼かつた時分の思い出話を聞いた。中でも印象的だったのは、絵の話である。朝起きたらまず空を観察するというのが、藤巻先生の長年の日課だという。晴れていれば庭に出て、雨の日には窓越しに、「B」眺める。そんな父親の姿に、幼い和也はおおいに好奇心をくすぐられたらしい。よちよち

歩きで追いかけていつては、並んで空を見上げていたそうだ。熱視線の先に、なにかとてつもなくおもしろいものが浮かんでいるはずだと思ったのだろう。「お父さんのまねをして、こう腰に手をあてて、あごをそらしてね。今にも後ろにひっくり返りそうで、見ているわたしはひやひやしちゃつて」奥さんは身ぶりをまじえて説明した。本人は覚えていないようで、首をかしげている。「それで、後で空の絵を描くんですよ。お父さんに見せるんだ、つて言つて。親ばかかもしれないんですけど、けつこうな力作で……そうだ、先生にも見ていただきたいたら?」「親ばかだつて。子どもの落書きだもん」照れくさげに首を振った和也の横から、藤巻先生も口添えした。「いや、わたしもひさしぶりに見たいね。あれはなかなかたいしたものだよ」「へえ、お父さんがほめてくれるなんて、珍しいこともあるもんだけね」冗談めかしてまぜ返しつつ、和也はまんざらでもなさそうに立ちあがつた。「あれ、どこにしまつたつけ?」「あなたの部屋じゃない?」納戸か、書斎の押し入れかもね」奥さんも後ろからついていき、僕は先生とふたりで和室に残された。

〔3〕 「先週貸していただいた本、もうじき読み終わりそうです。週明けにでもお返しします」なにげなく切り出したところ、先生は目を輝かせた。「あの超音波風速温度計は、実際に画期的な発明だね」超音波風速温度計のもたらした貢献について、活用事例について、今後検討すべき改良点について、せきを切つたように語り出す。お絵描き帳が見あたらなかつたのか、和也たちはなかなか帰つてこなかつた。その間に、先生の話は加速度をつけて盛りあがつた。ようやく戻ってきたふたりが和室の入口で顔を見あわせているのを、僕は視界の端にとらえた。^①自分から水を向けた手前、話の腰を折るのもためらわれ、どうしたものかと弱つている

と、スケッチブックを小脇に抱えた和也がこちらへすんずん近づいてきた。「お父さん」うん、と先生はおざなりな返事をしたきり、見向きもしない。「例の、南西諸島の海上観測でも役に立つたらしい。船体の揺れによる影響をどこまで補正できるかが課題だな」「ねえ、あなた」

奥さんも困惑顔で呼びかけた。と、先生がはつとしたように口をつぐんだ。僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。「ああ、スミ。悪いが、紙と鉛筆を持つててくれるかい」先生は言つた。和也がきびすを返し、^②無言で部屋を出でていった。

【4】おろおろしている奥さんにかわって、自室にひつこんでしまつた和也を呼びにいく役目を僕が引き受けたのは、少なからず責任を感じたからだ。父親に絵をほめられたときに和也が浮かべた表情を、僕は見逃していなかつた。雲間から一条の光が差すような、笑顔だつた。いつだつて陽気で快活で、いつも軽薄な感じさえする子だけれど、あんな笑みははじめて見た。「花火をしよう」ドアを開けた和也に、僕は言つた。「おれはいい。先生がつきあつてあげれば?」そのほうが親父も喜ぶんじゃない?」和也はけだるげに首を振つた。険しい目つきも、ふてくされたような皮肉っぽい口ぶりも、ふだんの和也らしくない。僕は部屋に入り、後ろ手にドアを閉めた。「まあ、そうかつかするなよ」藤巻先生に悪気はない。話に夢中になつて、他のことをつかのま忘れてしまつていただきます」と僕が席を立つたときも、なにが起きたのかふに落ちない様子できよとんとしていた。「別にしてない」和也は投げやりに言い捨てる。「昔から知つてるもの。あのひとは、おれのことなんか興味がない」腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。「でも、おれ

も先生みたいに頭がよかつたら、違つたのかな」「え?」「親父があんなに楽しそうにしてるの、はじめて見たよ。いつも家ではたいくつなんだろうね。おれたちじや話し相手になれないもんね」うつむいた和也を、僕はまじまじと見た。

【5】「親父にはついていけないよ。さつきの話じゃないけど、なにを考えてるんだか、おれにはちつともわかんない」僕は小さく息を吸つて、口を開いた。「僕にもわからないよ。きみのお父さんが、なにを考えているのか」和也が探るように目をすがめた。僕は机に放り出されたスケッチブックを手にとつた。「僕が家庭教師を頼まれたとき、なんて言われたと思う?」和也は答えない。身じろぎもしない。「学校の成績をそう気にすることもないんじゃないか、つてお父さんはおつしやつた。得意なことを好きにやらせるほうが、本人のためになるだろうつてね」色あせた表紙をめくつてみる。ページ全体が青いクレヨンで丹念に塗りつぶされている。白いさざ波のような模様は、巻積雲だろう。「よく覚えてるよ。意外だつたから」次のページも、そのまた次も、空の絵だつた。一枚ごとに、空の色も雲のかたちも違う。確かに力作ぞろいだ。「藤巻先生はとても熱心な研究者だ。もしも僕だったら、息子も自分と同じよう、学問の道に進ませようとするだろうね。本人が望もうが、望むまいが」僕は手をとめた。開いたページには、今の季節におなじみのもくもくと不穏にふくらんだ積雲が、繊細な陰翳までつけて描かれている。^③「わからないひとだよ、きみのお父さんは」わからないことだらけだよ、この世界は——まさに先ほど先生自身が口にした言葉を、僕は思い返していた。だからこそ、おもしろい。

(注) ○ ①～⑤は段落符号である。

○ 眉根^{まぶた}||眉の鼻に近い方の端。

○ 納戸^{など}||物置部屋。

○ 超音波風速温度計||超音波を利用して風速と温度を測定するもの。

○ せきを切る||抑えられていたものが一気にあふれ出る。

○ きびすを返す||引き返す。後戻りする。

○ 目をすがめる||片目を細くして見る。

○ ○ 卷積雲^{けんせきうん}||空の高いところに浮かぶ、まだら状の雲。うろこ雲。

○ 隠翳^{いんえき}||薄暗いかけ。

(一) 「A」、「B」にあてはまる最も適当なことばを、次のアから力までの中からそれぞれ選びなさい。

ア いたずらに イ いぶかしげに ウ うつかりと
エ こつそりと オ しなやかに カ とつくりと

(二) ① 自分から水を向けた とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアから工までの中から選びなさい。

ア 「僕」が和也の絵を見たいと奥さんに申し出たということ

イ 「僕」が藤巻先生と二人で和室に残つたということ

ウ 「僕」が藤巻先生に借りている本の話をしたということ

エ 「僕」が奥さんと和也の姿を目で追つたということ

(三) ② 無言で部屋を出ていった とあるが、和也がこのような行動をとるまでの心情の説明として最も適当なものを、次のアから工までの中から選びなさい。

ア 父親に對してわだかまりを抱いていたが、父親が自分を認める發言をしたことをきつかけに心が浮き立つた。しかし、絵を持つてき

た際の父親の反応に傷つき、その感情は失望へと変化した。

イ 父親に對して卑屈になっていたが、父親が自分を評価していたことを知つて自尊心が回復した。しかし、父親の發言が本心ではなかつたことがわかり、その感情は落胆へと変化した。

ウ 父親に對して尊敬する気持ちを伝えられずにいたが、父親が自分を認めてくれたことをうれしく感じた。しかし、「僕」と話す父親の親しげな様子に、その感情は憎しみへと変化した。

エ 父親に對して不愉快な気持ちを抱いていたが、気象研究の無意味さを指摘して父親をやり込めたことで心が晴れた。しかし、幼い頃の失敗を持ち出されて、その感情は恥ずかしさへと変化した。

(四) ③ 「わからないひとだよ、きみのお父さんは」 という發言に込められた「僕」の心情として最も適当なものを、次のアから工までの中から選びなさい。

ア 空や雲が大好きだった和也が、実は今でも父親を慕つてることをほほえましく思いつつ、息子に對して素直になれない藤巻先生の思いを代弁しようと思つていてる。

イ 和也の絵を見たいと言つていたのに、絵を持ってきた和也を無視する藤巻先生の真意が理解できず、自分も和也と同じ気持ちであることを示そうと思つていてる。

ウ 藤巻先生は気象研究にしか興味がなさそうに見えるが、実は和也の将来を考えており、単純には理解できない魅力をもつた人物であることを伝えようと思っている。

エ 幼い頃の和也が空や雲に強い関心をもつていたにもかかわらず、

気象学の道を歩ませようとしない藤巻先生に疑問を感じ、所属する研究室を変わろうと思っている。

(五) 次のアからオは、この文章を読んだ生徒五人が、登場人物について、意見を述べ合つたものである。その内容が本文に書かれていることに近いものを二つ選びなさい。

ア (Aさん) 和也の父親である藤巻先生のユニークな人柄が大変興味深く描かれていると感じます。先生は、気象のしくみを知りたいという純粹な好奇心の持ち主として描かれており、だからこそ、わからないからおもしろいという先生のことばには説得力を感じます。

イ (Bさん) 先生の奥さんは、夫である先生に理解があるのでしょう。先生が和也の気持ちに気づいていないときも、いつものことだと冷静に対応しています。本文に描かれた場面でも、先生が自分の研究分野について一方的に話をすらのを当然のことのように受け入れています。

ウ (Cさん) 和也は対照的な考え方をもつ両親の下で複雑な思いを抱いています。ふだんは陽気で活発な性格ですが、両親に対しても反抗的で、皮肉っぽい言動が目立ちます。時折、甘えた態度は示しますが、いろいろした気持ちを解消することはできないように見えます。

エ (Dさん) 先生は、和也の気持ちに気がつかないときがあるようです。悪気があるわけではなく、ひとつのことにつocusedして他のことに気がまわらないようです。先生はそのことを自覚して反省しているようですが、和也には自分が悪かつたという思いを伝えきれていません。

(六) この文章の表現の特徴として適当なものを、次のアからオまでのなかから二つ選びなさい。

ア 作者からの登場人物への評価を挿入することにより、場面全体に奥行きをもたらしている。

イ 擬態語を随所に用いることにより、登場人物の心情が理解しやすい描写となっている。

ウ 専門的な用語を平易なことばに言い換えることにより、全体を通してわかりやすい印象を与えていた。

エ 登場人物の一人が語り手となることにより、読者がその人物の心情を追体験できるようになっている。

オ 隠喻を効果的に用いることにより、登場人物の心情が直感的に理解できるようになっている。

四 次の漢文（書き下し文）を読んで、あとの（一から四）までの問い合わせに答えなさい。（本文の―――の左側は現代語訳です。）

(注) ○○○ 魯恭・袁安・肥親 || いずれも中国古代の王朝である後漢の家臣。
字 || 中国で、男子が成年後、実名のほかにつける別名。
肅宗 || 後漢の皇帝。

○ ○ ○
るきょう
恭・袁安・肥親
あさな
字 〔中国で、男子〕
しゆくそう
肅宗 〔後漢の皇帝〕

後漢の魯恭字は仲康、扶風平陵の人なり。肅宗の時、中牟の令
長官

中牟の令

に押せらる。専ら德化を以て理ることを為し、刑罰に任せず。

郡国に

螟ありて稼を傷ふ。犬牙の縁界も中牟に入らず。河南の尹袁安之を聞
害虫が発生して田畑の穀物を荒らした。県境が複雑に入り組んだ場所でも害虫は中牟県内に入らなかつた。
き、(2) 其の実ならざるを疑ひ、仁恕の據肥親をして往いて之を廉さしむ。

縁界も中牟に入らず。河南の尹袁安之を聞
雜に入り組んだ場所でも牟県内に入らなかつた。
かなん　わんわんあんじや
仁恕の豫肥親をして往いて之を廉さしむ。
仁恕という役職にあつた肥親に中牟を視察させた
長官であつた。

ア
開
女之を

恭阡陌を隨行し、俱に桑下に座す。雉有り過ぎて其の傍らに止まる。
あぜ道
せんばく イ
とも さうか
きじ かたは ウ
キジが目の前を通り過ぎて止まる。

止まる。

傍らに童児有り。
親曰はぐ
「児何ぞ之を捕らざる。」と。児言ふ。

兌言

「雉方に雛を将る。」と。親、瞿然として起ち、恭と訣れて曰はぐ。
かわいいのかね
ぢやんしてキジを捕まえ
ないのかね

四
八

「来たる所以の者は、君の政迹を察せんと欲するのみ。今虫境を犯さ
理由はあなたの治政を視察しようと思ったから

境を犯さ

す、化鳥獸に及び、
豎子に仁心有り。三の異なり。一と。
子供にも思ひやりの
心が備わっています

還り状を

以て安に白す。
『表状』(ひょうじょう)
(二二)

13

(問題はこれで終わりです。)

(一) 専ら徳化を以て理むることを為し、刑罰に任せず とあるが、その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から選びなさい。

ア 徳の高い人間ではなく、法律の専門家を重んじてゐるということ
イ 人民の徳が高まらないため、刑罰に頼つてゐるということ
ウ 刑罰に頼らず、徳による教えで世を治めているということ

(二) エ 世の安定よりも、自分の徳を高めることを優先してゐるということ
波線部アからカまでの中から、主語が同じものを全て選びなさい。

(三) ② 其の実ならざるを疑ひ とあるが、何を疑つてゐるのか。その内容として最も適當なものを、次のアからエまでの中から選びなさい。

ア 害虫による被害をまぬがれた県の中で、魯恭が治める県だけは穀物が実らなかつたこと
イ 魯恭が治める県には害虫が侵入せず、穀物の被害が生じなかつたこと
ウ 害虫が発生したことにより、魯恭が治める県でも多くの人々が飢餓に苦しんだこと

(四) エ 多くの県が害虫の対策に取り組む中、魯恭が治める県が最も早く駆除に成功したこと
ア 次のアからエまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選びなさい。

令和5年学力検査 全日制課程 一般選抜

第1時間 国語正答

問題番号		配点		正 答	配点上の注意事項
大問	小 問	大問	小問		
一	(一)	7 点	1	ウ	
	(二)		1	イ	
	(三)		2	オ	
	(四)		1	ア	
	(五)		2	ウ	
二	(一) ①	3 点	1	ア	二つともできて1点。
	②			エ	
	(二)		1	イ	
	(三)		1	エ	
三	(一) A	8 点	1	イ	二つともできて1点。 どちらか一方ができると1点。 二つともできると2点。
	B			カ	
	(二)		1	ウ	
	(三)		1	ア	
	(四)		1	ウ	
	(五)		2	ア, オ	
四	(一)	4 点	1	ウ	どちらか一方ができると1点。 二つともできると2点。
	(二)		1	エ, カ	
	(三)		1	イ	
	(四)		1	エ	
合 計		22点			